

## 婦人グラフ = The ladies' graphic

東京：国際情報社，1924—1928

本誌は、「国際寫真情報」誌や「劇と映画」誌の刊行実績により「画報界のエポックメーカー、名匠」（創刊号の『編輯の後』コラムより）と自負する国際情報社が、関東大震災の翌年1924（大正13）年5月に創刊した。当時としては珍しい変型A4判、「私のすきなすきな大好きなグラフ！…上品で高尚でしかもハイカラなのですもの」（1926年5月号）と読者に言わしめる内容、「あまり書店でうらぬ」（裏表紙の裏に毎号記載）という販売方針、そのいずれもが独自だ。

創刊号では、「フランスのボントンやア・ラ・モードやアール・ゴ・ボーテ\*、アメリカのレディース・ホームジャーナル」を挙げた上で、「丁度フランスのボントン誌の有無が家庭の高尚さのメーターになっているという。そこまで私たちは本誌を成長させたい」と意気込みを表わした。しかし2号から見られる判型や表紙を縁取る幾何学的デザインなどの装丁は、「アール・グー・ボーテ（Art-goût·beauté）」（Albert Godde, Bedin 1921—1933）を模倣しており、1927年7月号では「え、アール・グ・ボーテ\*張りですって、左様髓に夫に接近して来ました」と自認している。そのほかにも、「採長補短、世界的のグラフ数種を参考にして好ましい点はどしどし応用」したことは、「服装の巴里より」「流行の巴里より」などフランスの雑誌名を翻訳したと思われる記事名や、やはり転用と思われる多くのイラストからわかる。

竹久夢二が本誌の看板だった。1924年8月号から翌年5月号まで表紙を担当し、その後しばらく彼が姿を消すと、ちょうど開設された読者欄「グラフポスト」に毎号批判が寄せられ、夢二の再登場を促した。表紙や口絵の、ときに十数刷りにも及ぶ木版画は、「ガゼット・デュ・ボントン（Gazette du bon ton）」（Librairie centrale des beaux-arts 1912—1925）や「アール・グー・ボーテ」の表紙を飾ったポショワール\*を意識したと思われる。三色版やグラビア版などの印刷種類別に構成された目次は、木版だけでなくオフセットやグラビア印刷なども目玉としていたことをうかがわせる。1926年新年号に復活した夢二の絵は1927年2月号まで、木版画は同年6月号まで使われた。

当初は、小説や翻訳物、童話、シナリオなど読み物も充実していた。川端康成や芥川龍之介、吉屋信子といった人気作家、与謝野晶子や北原白秋といった歌人、作曲家や作詞家など、執筆者は驚くほど豪華だった。しかし翌1925年には「断然として記事を全廃、いよいよグラフとしての本領に」（1925年新年号）入ると宣言。1927年からは読者欄もなくし、手芸用の図案ページを増やしていく。その方針は「読む雑誌も勿論欲しいが、目を以つて観つゝ心を慰安し常識を涵養し智識を吸収するといふ事は、今や近代人にとつて止み難い欲求となつた」（1928年新年号）と正当化された。

本誌のキーワードは近（現）代を意味する“モダン”と“文化”だろう。本学園の母体である文化裁縫学院が開校するのが1922年だが、本誌にも「文化的」「文化の世」「文化家」「文化巻」など“文化”のつく語が頻繁に登場する。ここでいう文化とはモダンと同義である。“文化”が使われるとき、そこには洋風化を受け入れる姿勢がうかがわれる。和洋折衷のライフスタイルも、欧米での東洋趣味の流行と対比しながら積極的に紹介された。“モダン”がつく語の代表格は「モダンガール」

だが、こちらについては現状への批判が強い。変わりゆく生活や価値への容認と否認がせめぎあっていたことが伝わってくる。時折掲載された誌上座談会や風俗研究、今でいうストリートスナップなどからもそれを感じ取ることができる。

4年間を通じて、巻頭言を中心に女性の社会問題が語られた。男女差別、婦人参政権、廃娼運動、職業婦人、フェミニズム、前述のモダンガールなど幅広く取り上げられている。1926年7月号からは、毎月2種の職業婦人を紹介する連載も続いた。その一方で、令嬢という存在が同誌の大きな割合を占め、多い時には総ページ数の4分の1に及んだ。彼女たちは女優などと並んで、過渡期の様々な女性像を体現する格好の題材だったのだろうか。本誌の最終号1928年11月は秩父宮御大礼特集であり、刊行予定の『昭和聖帝御即位大典画史』も大きく宣伝されている。令嬢に加え皇族や結婚礼讃という編集内容と、社会問題としての女性論が併存することに、時代性を感じる。

本誌に披瀝される服装観や化粧観には、現代に通じる普遍性がある。「服装は人々の心の反映」だから「読書・教養で審美眼を養うべき」（1924年6月号）とか、「服装と云ふものはその人の性格なり頭脳なりの程度が直ぐ表はれる」（1927年10月号）などという考え方は、私たちがファッションに求めている理想と変わらない。「若い女性が化粧をする目的は…自己優越を主張することで、…誰もが有する必然的な本能の発露」（1925年8月号）という化粧肯定論も、礼法や身だしなみといった従来の日本の化粧観とは異なる新しい発想だ。

本誌は「何でも人真似の上手な日本の御婦人方」（1924年10月号）などと当時の女性を批判しながらも、「職業婦人の全盛と同時に副産物として盛んになつてきたのが、婦人の洋装」（1924年12月号）と、時代の変化を的確にとらえた。「女性洋装も…そのうちには、外国人の洋服の借着でなく、日本人の着る服装としてびつたり似合つてくるだらう」（1928年新年号）という予告は、いま実現されているといえるのだろうか。

(横田尚美)

\* 傍点箇所は引用原文ままの表記

\* ステンシルの一種、1色ごとに作られる型付板の孔から色を刷り込んでいく手仕事印刷



2巻8号（1925年8月号）表紙 絵は亀井實



2巻2号（1925年2月号）「カメラを透したアエニウ（アベニュー 筆者注）の女性（帝都美人容姿）」。モノクロ写真ページ